

<報告・記録>

山口県「夏休みこども塾」アートプロジェクト における授業実践報告

—— 教職課程の大学生と児童・生徒との協働による造形活動を通して ——

川 野 裕一郎

東亜大学芸術学部アートデザイン学科
kawano@toua-u.ac.jp

《要 旨》

本稿は、2023年2月4日（土）に山口県下関市立熊野小学校において実施された「夏休みこども塾」アート講座「巨大ふうせんを作ろう」の実践報告である。本活動は、東亜大学教職課程の学生が地域の小・中学生と協働して行った造形活動であり、大学生にとっては教育的実践力の育成、児童・生徒にとっては創造的表現と社会的交流の機会を提供することを目的に計画、実施された。以下では、活動を通して見られた教育的効果や、地域との連携の意義について、具体的な実践内容と学生・児童の反応をもとに詳細に考察する。

キーワード：地域連携、総合的な学習の時間、造形活動（創造的表現）、
教育的実践力（教職課程での学生の学び）

1. はじめに

近年、教育現場では「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められており、教員養成課程においても実践的な教育活動の経験が重視されている。特に、地域社会との連携を基盤としたアクティブラーニング型学習は、実際の教育場面での気づきや指導技術の獲得に直結するものとして注目されている。さらに、子どもたちにとっても、学校教育の枠を超えた創造的な活動への参加は、自己表現や社会的スキルの育成において大きな意義を持つ。そのような意図のもと、「夏休みこども塾」アート講座「巨大ふうせんを作ろう」は、学校教育の授業内での活動ではなく、地域連携事業として実施された。それは、小学校学習指導要領総則（文部科学省2017a）に示されている「学校・家庭・地域が

連携して教育を行う」という観点に根差したものであり、総合的な学習の時間の学びを学校外に拡張した取り組みと位置づけられる。

同時にその内容は、平成29年に告示された現行の小学校ならびに中学校学習指導要領において定められている「総合的な学習の時間」の理念と密接に関わっている（文部科学省2017c, 2017d）。小学校ならび中学校の学習指導要領において、「総合的な学習の時間」では、自ら課題を見だし、主体的に学び、よりよく問題を解決する資質・能力の育成が求められている。特に、目標の趣旨として「自己の生き方を考える学習」が求められ、そのための探究的学習の指導ポイントとして「他者と協働する学習」が重視されている。その意味で、小中学校に在籍する児童生徒が、学年や所属の違いを超えて互いに協力しながら巨大風船という課題に向けて試行錯誤する実践として企図された本活

動は、社会性・協働性の育成という点においてまさにその趣旨に合致するものである。

教科教育という点においても本活動は重要な意義を有している。小学校学習指導要領では、図画工作科の各学年の学習内容の「表現」領域において、「造形遊びをする活動を通して、身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に造形的な活動を思い付くことや、感覚や気持ちを生かしながら、どのように活動するかについて考えること」や「絵や立体、工作に表す活動を通して、感じたこと、想像したことから、表現したいことを見付けることや、好きな形や色を選んだり、いろいろな形や色を考えたりしながら、どのように表すかについて考えること」ができるように児童を指導することを求めている（文部科学省 2017e）。他方、中学校学習指導要領では、「表現」領域や「鑑賞」領域において「対象や事象を見つめ感じ取った形や色彩の特徴や美しさ、想像したことなどを基に主題を生み出し、全体と部分との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ること」や「伝える目的や条件などを基に、伝える相手や内容などから主題を生み出し、分かりやすさと美しさなどとの調和を考え、表現の構想を練ること」、そして「身の回りにある自然物や人工物の形や色彩、材料などの造形的な美しさなどを感じ取り、生活を美しく豊かにする美術の働きについて考えるなどして、見方や感じ方を広げること」を生徒が身につけられるよう指導することを求めている（文部科学省 2017f）。ビニール袋に自由に描画し、それを立体的に構成する表現活動をともなう本アートプロジェクトは、そうした指導領域に結びつくものであり、完成後に自分や他者の描いた絵を鑑賞し合う場面は、「表現と鑑賞の一体化」という学習指導要領改訂の方向性にも合致している。

このように「夏休みこども塾」アート講座「巨大ふうせんを作ろう」は、現行の学習指導要領において総則に示された理念と各教科教育の目標を踏まえて実施されたのである。以下では、東亜大学人間科学部心理臨床・子ども学科に在籍し、教職課程を履修する学生が、地域の

児童・生徒とともに実施した本活動の活動報告を通じて、教育実習の一形態としての意義を再確認し、現代の教育課題に応じた実践的な学びの可能性を検討するための素材として、特に造形活動という創造的表現の場において、教職課程の学生がどのように教育的役割を果たし、子どもたちの成長を促したのかを具体的に報告・考察する。

2. 活動の概要

「夏休みこども塾」アート講座「巨大ふうせんを作ろう」は、山口県大学リーグやまぐちを主催として、2023年2月4日（土）10～12時に山口県下関市立熊野小学校において開催された。活動内容を端的に説明すると、複数の教材用ビニール袋を繋ぎ合わせ、その表面に自由にペンで描画した後、大型扇風機を用いて内部に空気を送り込むことで、空間的かつ視覚的にダイナミックな巨大風船を完成させるというものであった。参加者は、主体的に参加した下関市



図1 活動開始時の様子。大学生による説明後、制作作業に入る。

立熊野小学校の児童のほか、学校を介した大学リーグやまぐちからの呼びかけに応じた熊野近辺に在籍する中学生からなる。参加した小中学生が課外活動の一環として参加したという意味で、本活動は各校の学習カリキュラムに組み込まれた活動というよりも、「地域とつながる課外型プログラム」と位置づけることができる。

活動を企画し、教材を準備したり、進行や運営組織化するうえで中心的役割を担ったのは、本学の教職課程において「図画工作研究」を履修した上記の学生11名である。この科目は実習的活動を重視する科目であり、その意味でこのアートプロジェクトそのものも本学の教職課程の履修目標に適った活動と言える。学生たちは、「図画工作研究」の授業の中で教材選定や最終制作物の構造を踏まえた安全面を含む制作手順を検討したうえで、活動当日には小・中学生への活動目的や制作手順を進行シナリオに沿って説明した(図1)。また単なる進行役ではなく、グループに分けられた児童生徒の創作意欲を引き出すファシリテーターとしての役割を担った。必要に応じて活動内容を児童にわかりやすく補足したり、作品の組み立て補助を行ったりしたばかりか、児童同士の意見交換を促す発問や声かけを行うことで、参加者が学習活動を円滑かつ主体的に展開できるように配慮した。その結果、活動の過程で児童・生徒同士の協力や学年を超えた助け合いも自然発生的に多く生じるなど、活動の中に「学び合い」を組み込むことに成功した。さらに学生たちは、活動全体を俯瞰しつつ学習目標に即して進行を調整するなど、教育的コーディネーターとしての立場からも学習過程を支えた(図2)。特に児童グループのリーダー的存在となった学生は行程全体の統括に貢献し、円滑な活動推進に寄与した。指導教員は全体の監督と安全管理を担った。

本活動を象徴する特徴のひとつは、地域支援者が会場設営や食事提供などを通じて活動を補助した点である。特に昼食では、地域団体「あいくまの食堂」の協力を得て「くまの応援隊」が手作り弁当を提供し、それを参加した児童生徒、指導役の大学生、地域支援者たちがおなじ



図2 巨大風船の作品制作について説明し、児童から質問を受けるリーダー役の大学生。

教室でともに囲み、年齢の差を超えて場を共有する時間となった。昼食時間はまた、地域食材の活用方法など、食文化についての理解を深める機会として利用された。

3. 本活動の教育的意義と教育効果

制作過程や完成後の活動を通して、児童生徒たちの間には達成感や一体感が生まれ、また大学生にとっても教育者としての手応えを感じる瞬間が多くあった。本活動では、大学生・児童生徒の双方において多層的な学びと成長が確認された。以下では、教職過程に在籍する大学生、そして児童生徒の順に整理して示したい。

3-1. 大学生にとっての教育的意義

まず、本活動をとおして、大学生の側は実践的な指導力を大いに高める経験を与えた。その意義について論じるとすれば、大きくわけて「実践的指導力の涵養」と「教師としての在り方の体感」の2つの側面に整理できる。

参加した児童には、それぞれ個性がある。それにあわせて創作活動を支援するためには、子どもたち一人ひとりを注意深く観察し、その自発的取り組みを引き出す力が必要となる。クラス集団などの大人数を動的に把握し、突発的事態へ対応しながら児童生徒を指導するには、多様な現場を経験して、成長に応じて変化する児童生徒の個性とその把握といった基礎的实践力を養うことが不可欠である。今回は、多様な年齢を含む集団を対象とした説明や指導、補助などの活動を通して、児童生徒に向き合う貴重な場となった。そのなかで多面的な教育実践が求められた学生たちは、「教える」という行為が一方的な指示ではなく、子どもと共に学び、関わり続ける双方向的な関係であることを理解しながら、講義で学んでいた理論を実践の現場に接続する貴重な機会を得たといえる。

3-2. 児童・生徒にとっての教育的効果

児童生徒にとって、本活動への主体的参加は自分に内在する「表現力・創造性の開花」へつながる可能性を秘めている。完成した作品は、



図3 ビニール袋を繋ぎ合わせて大きな風船にする。



図4 完成した巨大風船の中に入ってみて自分の描いた箇所や友人の描いた絵を鑑賞する。

体育館をいっぱい満たすスケール感を持ち、創造的な成果物としての価値に加え、参加者の達成感と喜びを視覚的・身体的に体験させるものである（図3、4）。自らの手で描き、組み立てた作品に対する愛着が生まれ、想像から現実への創造過程に喜びを見出す。身体感覚を伴う没入型学習の場、すなわち「からだを使って学ぶ」造形体験となったその創造過程は、参加した児童生徒にとって感覚統合や集中力の向上を図る場として作用した。

一方その過程では、「社会性・協働性」を身につける子どもたちの姿も確認することができる。たとえば、同じ目的を共有する中で、自らの役割を理解し、互いに補完しながら協力するだけでなく、年齢のちがいを超えて互いに助ける態度が観察された。

3-3. 地域連携による学習の深化

本章の最後に指摘しておきたいのは、本活動のようなプロジェクトは地域連携によってその学習効果を多面的に深化させることができると

いう点である。前述のように本活動では、地域団体と連携することで、地域固有の食材や食文化に関心を持ってもらう取り組みを組み込んだ。学習指導要領における「総合的学習の時間」とは、一般に特定のテーマを多面的に追求する傾向が強い。しかし本活動のように、ある学習機会を地域団体と大学・学校が協働で多面的に利用することで、学校教育の枠を超えた学びの場が新たな創造性を喚起する可能性がある。そこに、ひろく社会教育という視点から児童生徒の学びを地域ぐるみで支援する意義と効果が生じるのである。

4. 教職課程における実践的学び

本プロジェクトは、教職課程における「理論と実践の往還」を体現するフィールドの一環として構想され、実施された。本学の教職課程においても、いくつかの点で極めて有意義であったといえる。以下に整理して述べておきたい。

4-1. 教育現場における「気づき」の獲得

学生たちは、制作現場での子どもたちの反応、関係づくり、表現への導き方を観察・体験し、大学での学びを実践知として再解釈する視点を獲得した。児童生徒は一人ひとりが個性的な存在である。自発的に参加した点において取り組みの主体度はある程度均一であるものの、年齢に応じて理解度やコミュニケーション能力は一様ではない。また、児童数や生徒数が大きく減少し、一学年に複数の30人学級が成立し得ない地方の教育環境においては、大学での教科書的な学びは必ずしも現状にあてはまらない恐れもある。今回のような活動は、教科教育の現場に即応するものではない。しかし学校教育の場は、必ずしも学年割りで進むとは限らない。その意味で今回の活動で得られた「気づき」を体現する実践知は今後の教育活動においてきわめて重要な意義を持つものと言える。

4-2. ファシリテーション能力と学習環境構成力の育成

本活動では、学生たちが活動全体の流れを設

計し、予測困難な状況に即応しながら子どもたちの学びを支えるコーディネーターの役割を果たした。学校教育の場において必要とされるのは、「授業をする力」だけではない。むしろ授業空間を成立させる能力、すなわち「学びの場をつくる力」を養うことが不可欠である。年齢の異なる児童生徒を対象として企画された本活動は、成長度の多様な参加者を前にして、各学年の教育目標を視野に収めた設計能力、ファシリテーション能力、学習環境構成力を必要とする。その意味でこのような企画を積極的に教職課程カリキュラムに取り込んでいくことは、現場即応性の高い教育的力量の形成に直結している。

4-3. 教職に対する内発的動機づけの強化

本活動の終了後、ふり返り活動を行った。そのなかで明らかになったのは、「子どもたちの反応に感動した」「もっと関わってみたい」と、多くの学生が教職への意欲と自覚を高めた点である。教職課程を履修する学生にとって、教員として実践的能力を養うことのできる機会と時間は限られている。専門的な教科教育法に関する科目もかならずしも演習的学習の場として設定されているわけではない。そのような状況の中で、本活動のように本来教職課程とは関連のない課外活動を、教職課程のカリキュラムと関連づけて設計し、学生に演習的学習の場として提供することは、教職という仕事に対する動機づけを強化するだけでなく、学生たちの実践力と対応力の強化にもつながる。

5. 考察

本プロジェクトの実践を踏まえ、以下の3点において教育的意義と課題を考察する。

5-1. 造形活動における協働の意味

巨大風船の共同制作という活動は、単なる造形表現ではなく「協力しなければ成立しない作品」であった。そのため、児童・生徒にとっては、自然に他者との関わりを持つ動機づけとなり、結果的に学年や学校の枠を超えた交流を生

んだ。この点は、学校教育の中で十分に育みにくい「異年齢集団における協働性」を支援する可能性を示す。

一方で、指導者である大学生にとっても、子ども同士の関係性を観察し適切に介入する実践力が試される場となり、教職課程での実習的意義を強く有していた。

5-2. 大学生の教育的力量形成と課題

学生は事前準備から当日の進行、子どもとの関わりを通じて「授業を運営する力」だけでなく「学びの場を構成する力」を学んだ。しかし一部には、突発的な事態（材料の不足、子どもの集中力の途切れなど）への対応に戸惑う姿も見られた。これは、大学における模擬授業や理論学習では補いきれない、現場経験の必要性を示している。今後は、このような地域連携活動を体系的に教職課程に組み込み、学生が段階的に力量を積み上げられるカリキュラム設計が求められる。

5-3. 地域と学校・大学の連携モデルとしての可能性

「夏休みこども塾」という場合は、学校教育・大学教育・地域資源（地域団体やボランティア）の三者が交わる実践例であり、教育活動の拡張モデルとして大きな意義を持つ。特に、地域食堂による昼食の提供は、単なる補助的支援に留まらず「共に時間を過ごす文化体験」としての教育効果をもたらしたと考えられる。一方で、こうした連携は一回的なイベントに終わる危険性もあり、持続的な仕組みづくりが課題として残される。

6. おわりに

本稿では、「夏休みこども塾」アートプロジェクトにおける実践報告を通じて、大学生・児童・地域が交わる造形活動の教育的価値を考察した。今後は、こうした取り組みを継続的に記録・分析することで、教職課程のカリキュラム開発および地域教育資源の有効活用に寄与する知見を蓄積していくことが求められる。

参考文献

有元秀文（2019）『アクティブ・ラーニング時代の教師教育』学文社
河合雅雄（2018）「図画工作における協働的表現活動の教育的意義」『教育実践研究紀要』第14号，pp.25-34
清水裕子（2021）「地域連携を活用した教職課程の実践的指導力育成に関する一考察」『教師教育研究』第6巻，pp.45-53
文部科学省（2017a）『小学校学習指導要領（平成29年告示）』文部科学省初等中等教育局
文部科学省（2017b）『中学校学習指導要領（平成29年告示）』文部科学省初等中等教育局

文部科学省（2017c）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編』文部科学省初等中等教育局
文部科学省（2017d）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編』文部科学省初等中等教育局
文部科学省（2017e）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編』文部科学省初等中等教育局
文部科学省（2017f）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編』文部科学省初等中等教育局

A Practical Report on Teaching in the “Summer Vacation Children’s School” Art Project in Yamaguchi Prefecture:

— Collaborative Creative Activities between University Students
in the Teacher Training Program of the Department of Child Studies
and Schoolchildren —

Yuichiro Kawano

Department of Art and Design, Faculty of Arts, University of East Asia
kawano@toa-u.ac.jp

Summary

This paper presents a practical report on the art workshop “*Let’s Make a Giant Balloon*” held on February 4, 2023 (Saturday) at Kumano Elementary School in Shimonoseki City, Yamaguchi Prefecture, as part of the “*Summer Vacation Children’s School*” program. The activity was a collaborative creative project in which students of the teacher training program at Toa University worked together with local elementary and junior high school pupils. The project was designed to cultivate the educational practice skills of the university students, while at the same time providing the children with opportunities for creative expression and social interaction. In the following sections, the paper examines in detail the educational effects observed through the activity, as well as the significance of collaboration with the local community, drawing on specific accounts of the practices implemented and the responses of both the students and the pupils.

Keywords: community collaboration, Period for Integrated Studies,
formative art activities (creative expression),
competence in educational practice (in teacher education)